



TITLE:

### 3.研究会(III 共同利用研究)

AUTHOR(S):

---

CITATION:

3.研究会(III 共同利用研究). 霊長類研究所年報 1990, 20: 86-90

ISSUE DATE:

1990-08-07

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/164075>

RIGHT:

### 3. 研 究 会

#### ニホンザルの分布と個体数と生息環境

日 時：1989年10月13日

場 所：京都大学霊長類研究所

参加者：約40名

#### プログラム

##### 1. 課題の趣旨説明

後藤俊二（京大・霊長研）

##### 2. 全国群れ分布に関するデータベースの作成

渡辺邦夫（京大・霊長研）

##### 3. 群馬県における分布と個体数と生息環境

上原貴夫（長野短大）

##### 4. 近畿圏における分布と実態調査

清水 聡（大阪大）

##### 5. 中国地方における分布と個体群の動態

林 勝治（宇部短大）

##### 6. 全国規模の生息個体数推定方法

羽柴克子（筑波大）

##### 7. 白山山系の分布と個体数と生息環境

水野昭憲（白山自然保護センター）

##### 8. 宮城県における分布・個体数の現状と歴史的変遷

遠藤純二（石巻市立東浜小）

##### 9. 熊本県における分布調査

藤井尚教（尚綱大）

##### 10. 今後の計画とまとめ

杉山幸丸（京大・霊長研）

世話人：杉山幸丸・後藤俊二・

渡辺邦夫・山極寿一

本課題の第1年度に当たり、各関係研究員がこれまでの実績と今後3年間の計画を話した。7件は1ないし隣接数県（または山系）のニホンザル分布と個体数の把握を実地踏査、聞き取り、アンケート調査等で実行中であり、調査方法の問題点も含めて全体計画が示された。1件は、全国の群れ分布の情報を個別のデータとして埋没させずにコンピューターに入力して集積しようという提案であり、もう1件は全国の生息頭数を推定把握しようという試みであった。各地域の調査に関しては、地道な分布と個体数の把握だけでなく、近年

問題となっている猿害や分布範囲の変動とそれらの実態・要因分析にまで分け入ることが要請された。白山山系では、実際、個体数変動や分布の広がりや逐年的に追跡記録されており、また群馬県では、山間への道路距離の延長と野生ザルの人慣れが並行して進んでいることが示された。また、全国生息個体数の推定は未だ荒削りな段階であり、方法の再検討が要請された。各地の調査を踏まえて全国のニホンザルの生息実態の全体像を把握するために、互いに情報を交換し、方法を改良し合って進めることになった。

（文責：杉山幸丸）

#### 動物の音声コミュニケーションからのヒトの音声言語へ

日 時：1989年12月22～23日

場 所：京都大学霊長類研究所

参加者：約50名

#### プログラム

##### 1. 鳥類の発声と聴覚への相互適応

岡ノ谷一夫（上智大・生命研）

##### 2. コシジロウミツバメの鳴声による性・種認知仕組み

田岡三希（日本女子大・生物）

##### 3. 野生チンパンジーの音声の個体差と集団差

長谷川寿一（帝京大・心理）

##### 4. ビグミーチンパンジーの音声

岡安直比（京大・人類進化）

##### 5. エフェビグミーの歌にみられる発声行動の2つの形式

澤田昌人（京大・人類進化）

##### 6. エソロジーの音声研究の今後

正高信男（京大・霊長研）

##### 7. ヒト化と左半球優位

小嶋祥三（京大・霊長研）

##### 8. ヒトの手語の文法について

鳥越隆士（国立リハビリセンター）

##### 9. ヒトの手語の伝達と維持

青木健一（東大・人類）

##### 10. 最近報告されたネアンデルタールの舌骨装置を中心に

葉山杉夫（関西医大・解剖）

##### 11. ヒトの左半球の運動機能について

濱中淑彦（名市大・精神神経科）

12. サルの利き手について

久保田 競（京大・霊長研）

13. 総合討論

なお司会は正高信男，松沢哲郎，木村賛，小嶋祥三，久保田 競がおこなった。

この研究会は当初，様々な動物の聴覚一音声についての話題を提供し合い，そこからヒトの音声言語の特性を論ずる予定であった。その後音声言語の基礎となる運動能力，またそれに密度に関連する左半球優位の重要性がクローズアップされた。その結果，第1日目は聴覚一音声について，2日目は運動，半球優位について論ずることとなった。聴覚一音声については，鳥類の実験室とフィールドにおける実験的研究，チンパンジーのフィールドにおける研究，ヒトではビグミーの歌，日本人の母子の音声的な交互作用についての発表があった。運動，半球優位については，サルの利き手，ヒトの失行症，手話にまつわる話題が提供された。またネアンデルタール人の舌骨装置が現生のヒトのそれと差がないという，最近の研究が紹介された。総合討論が運動，半球優位に偏ってしまったのが心残りである。

（文責：小嶋祥三）

分布限界域におけるニホンザルの生息環境と地域  
個体群の動態

日 時：平成2年3月9日（金）

場 所：京都大学霊長類研究所

参加者：約30名

プログラム

1. 黒部川流域のニホンザル

赤座久明（富山県大沢野中学校）

加藤 満（愛知県高蔵寺高校）

2. 高瀬川流域のニホンザル

泉山茂之（野生動物保護理事務所）

3. 日光山地のニホンザル

小金沢正昭（栃木県立博物館）

4. 下北半島のニホンザル

森 満（下北野生生物研究所）

足沢貞成（京大霊長研）

世話人：鈴木 晃，東 滋，和田一雄，足沢貞成

1. 黒部川流域のニホンザルに関しては，調査地域流域に沿っての約40km内にいる31群のニホンザルの群れサイズと構成が示された。下流域の群れに関しては，テレメトリーによって群れの土地利用のあり方が明らかにされた。調査地は急斜面で，群れは主として河原や，その周辺の植生利用が顕著で，現地でダム建設にともなって，群れの下流域への移動が見られ，最近の農耕地での猿害と共に注目しなくてはならない。

2. 高瀬川流域のニホンザルに関しても，季節を通しての土地利用のあり方が中心的テーマとなった。ここでの群れは冬季を高瀬川沿いの谷間ですごし，雪解けと共に高地へ登り，夏から秋を亜高山帯の針葉樹林帯を越した高地ですごすことを特徴とする。ハイマツ帯とその周辺の草地での土地利用は特徴的である。

3. 日光では，これまで約30頭の個体にテレメータを装着し，3群についての泊り場を中心とした遊動域が観察された。季節を通しての植生の垂直利用を特徴とする。

4. 下北サルに関しては，全体として分布限界地域での土地利用の季節的特徴が論ぜられた。個体群動態に関しては，より組織的・長期的調査の必要性が論ぜられた。テレメトリーに関しては，調査後の首輪の回収が考慮される必要性が論じられた。

（文責：鈴木 晃・東 滋）

第19回ホミニゼーション研究会

日 時：平成2年3月15～16日

場 所：京都大学霊長類研究所

参加者：約100名

プログラム

3月15日

1. 雪と氷の生態学：ユキムシの世界

幸島司郎（京大・理）

2. タンガニイカ湖の「種間社会」

幸田正典（大阪市大・理）

### 3. 森林と動物の相互関係

湯本貴和 (神戸大・教養)

### 4. 熱帯多雨林における霊長類と有蹄類の競争と進化

岩本俊孝 (宮崎大・教育)

### 5. 環境破壊と霊長類：ボルネオの森林火災の例

鈴木晃 (京大・霊長研)

3月16日

### 6. カラハリ狩猟採集民の環境と社会の変容

田中二郎 (京大・アフリカ研)

### 7. パプア・ニューギニアにおける焼畑農耕と環境とのインタラクション

大塚柳太郎 (東大・医)

### 8. 人間活動と地球的規模の環境破壊

長谷川真理子 (東大・理)

### 9. 熱帯林破壊と環境

荻野和彦 (愛媛大・農)

### 10. 「環境問題」をめぐる環境

米本昌平 (三菱化成生命科学研)

総合討論：司会 江原昭善

今年度のホミニゼーション研究会では、ひろく「環境」に焦点を合わせて論じてみようということになった。いま、国際的にも国内的にも、あらゆる意味で環境問題がクローズ・アップされている。それらはいずれも、地球的規模で考察しなければ、正しい姿は見えてこない。

重要な視点がもうひとつ、環境はただ単なる物理的空間ではないし、生物の外にある空間でもない。個々の生物もしくは生物群が、自然のなかにあって、それぞれ特定の機能的・生態的システムを形成しているのである。そのシステムから強引に外的条件を切り離し生物もしくは人類の外にあるもの、それが環境と呼ばれている。いずれの意味での環境も、当然のことながら自然界ではかなりうまく調和し、全体として帳尻が合うような仕組みになっていた。

しかし人類が人類としてこの地上に出現して以来、その在り方は、この調和をひっかけ回すことから始まった。しかし自然への依存度が強かった狩猟・採集時代には、あまり問題にはならなかった。農耕・牧畜が本格化し、人口の増大と集中化が進み、次第に自然とのバランスが崩れ始めた。そしていまや、人類の拠って立つ基盤を自らの手

で崩壊させつつある。

この時点において、人類は大きく思考前提を転換させねばなるまい。ベーコン以来の「自然を痛め付けて、むりやり答を吐き出させる（これを実験とよんだ）」系譜をひく現代の機械論的発想を変えねばなるまい。環境を人類の外にある条件とみなし、痛め付けには手加減を加えるべきだといった発想では、ことは解決しない。

今回の研究会では、微小生物から、魚類や哺乳類（幸島、幸田、湯本、岩本）、霊長類や人類の生態的在り方を通覧し（鈴木、田中、大塚）、とくに森林が生物の生存にとっていかに深層の構造に組み入れられているか、だからといって、意図的に造り出され管理された人工的自然（たとえばイギリスやドイツやスイスなどの）がいかに中途半端なものか（荻野）が、それぞれ豊富で具体的な例を示しながら論じられた。これらの問題点を解決するには、哲学的レベルにまで止揚する必要がある（長谷川）し、政治的配慮の欠陥を是正しなければならぬ（米本）ということまで、議論がおよんだ。

（文責：江原昭善）

## ミニ研究会

### 視覚認知の心理学と生理学

日 時：1989年12月2日（土）

10：30～16：20

場 所：京都大学霊長類研究所・会議室

参加者：約60名

#### プログラム

#### 1. はじめに

三上章允 (京都大・霊長研)

#### 2. 運動視における大脳皮質の役割

小松英彦 (電総研・情報科学部)

#### 3. オプティカルフロー・アルゴリズム

安西祐一郎 (慶応大・理工学部)

#### 4. 月の錯視と視覚行動論

荻阪良二 (愛知学院大・文学部)

#### 5. 見ることと身体

佐々木正人（早稲田大・人間科学部）

## 6. 総合討論

戸田正直（中京大・文学部）

世話人：三上章允，松沢哲郎，林基治，久保田競

上記のようなプログラムにそって，視覚認知の心理学と生理学における最新の研究成果に基づいた話題提供と討論が行われた。運動視をめぐる2つの演題では，運動の視覚認知，運動する目標を目で追いかける追跡眼球運動，自己運動によって周囲の景色が運動と逆方向へ流れて見えるオプティカルフローの問題を，生理学的知見にもとづく脳内機構の問題と，情報工学にもとづく理論的考察の両側面から取り上げた。後半2つの演題では，見るヒトの条件が「見え」にいかに関与するかが論じられた。「体のある視覚システム」の視点の重要性が指摘された。総合討論では，心理学的研究，情報処理の理論的研究，生理学的研究成果を性急に結び付けることの危険性ととともに，今後とも関連分野で交流を続けることの必要性が確認された。

（文責：三上）

## 動物実験と実験動物の福祉

日 時：1980年3月6日

場 所：京都大学霊長類研究所

参加者：約35名

### プログラム

#### 1. ワシントン条約と動物実験

トム・ミリケン（トラフィックジャパン）

#### 2. キリスト教の人間観と動物に対する人間の責任

北原 隆（上智大・生命科学）

#### 3. 「動物実験指針」の適正な運用に関する私見

前島一淑（慶応大・医）

#### 4. 動物実験への展望

山口千鶴子（日本動物福祉協会）

#### 5. 総合討論

世話人：野崎眞澄，三上章允，松林清明，後藤俊二，竹中 修，正高信夫（京大霊長研サール委員会委員）

上記研究会は，動物実験と動物福祉の問題を

色々な角度から取り上げるにより，これらの問題に対する理解を深める目的で，霊長類研究所サール委員会により企画された。トム・ミリケン（Tom Milliken, Traffic Japan：野生動植物国際取引調査記録特別委員会）は，ワシントン条約遵守の立場から，ワシントン条約の概説と霊長類の国際取引の実状について発表した。北原隆は，キリスト教の動物観について，創世記にある「動物を治めよ」を例に，尊敬の対象としての動物，また同じ運命共同体としての動物であることの認識を強調した。前島一淑は，日本における動物実験指針の策定の経緯と指針の運用の実状，及び北米における最近の傾向について報告した。山口千鶴子は，実験動物の取扱の現状と対策，並びに動物実験に対する動物福祉活動の将来の展望について発表した。

（文責：野崎眞澄）

## 志賀高原横湯川流域に生息するニホンザル地域個体群の動態

日 時：1990年3月8日

場 所：京都大学霊長類研究所

参加者：約30名

### プログラム

#### 1. 志賀高原のサル食物，とくに果実類の生産量変動

小見山 章（岐大・農）

#### 2. 横湯川のサルの群間関係

好広真一（竜谷大）

#### 3. 志賀高原における冬期のニホンザルの糞分析

齊藤良裕

#### 4. Nipple preferenceについて

田中伊知朗（東大・理）

#### 5. 志賀A<sub>1</sub>群の個体間関係について

常田英士（地獄谷野猿公苑）

世話人：鈴木晃・東 滋・和田一雄・足沢貞成

地域個体群を維持するための生息環境，オスの移動と群れの出会いからみた群間関係，冬期の採食量推定等から横湯川地域個体群の実体を多面的に追求することがこの課題研究の目標であった。小見山 章（岐大・山地研）は10年間にわたる秋の主要食物であるミズナラ，ブナ，ミズキの年間生産量変動をseed trapを用いて明らかにした。

他方、同地域の植生図を作製し、これを基礎に3種の果実の総生産量を推定した。これら3種は異なる豊凶のリズムをもつことを示した。これらの生産量は地域的に偏りをもつので、群れの土地利用はその偏りと同調することを示唆した。

齊藤良裕は冬期の糞の分析から1日の摂取量推定を試みた。糞に含まれるセニ断片から属又は種の同定が可能であり、冬芽鱗片による同定の可能性も示唆した。一方でハナレザルの26時間連続追跡を行い、一日の糞の排泄量を確定した。これらに採食行動の資料も加え、1日の採食量を推定した。

好広真一（竜谷大）はB・C2群の出会いの行動観察から両群は敵対的行動を示さなかったことを指摘した。

田中伊知朗（東大・人類）はNipple preferenceをとり上げ、以前のアカンボが利用した、別の乳房を利用することを示した。

常田英士（地獄谷野猿公苑）は餌付けされたA群の長期観察にもとづき、餌付けと初産年齢変化、出産間隔変化などを明らかにした。

以上にのべた多面的なアプローチの中から少しずつ地域個体群の実態が浮かび上がると期待され、今後の継続がさらに必要だと思われる。

（文責：和田一雄）